



発行所 日刊建設工業新聞社
〒105-0021 東京都港区東新橋2-2-10
電話03(3433)7151 http://www.decn.co.jp/
©日刊建設工業新聞社 2018
印刷所 電話03-3433-7151 mail-ed@decn.co.jp
電話03-3433-7152 mail-sa@decn.co.jp
FAX 電話03-3433-7154 e1gyp@decn.co.jp

THE DAILY ENGINEERING & CONSTRUCTION NEWS

日刊建設工業新聞

2018年(平成30年) 7月3日 火曜日
第19460号

(第3種郵便物認可)

総合

堰は河川を横断して水を

せき止める大規模な構造物

である。長良川河口堰(三重

県)は、長良川の河口から5

・4キロ上流に建設された日

本で有数の大堰である。基

本設計は何十年前の設計

そのままである。技術革新

の時代にもっと斬新な設計

にすべきだと考えたが、裁

判で係争中であり、主要証

拠図面として裁判所に提出

されているので、決して変

えてくれるな、変えれば自

明治維新150年と治水の歴史

竹林 征三

18 鳴鹿大堰から大河津可動堰へ

的に設計に関わっている者は、と言われる人がいるが、中川博次先生は、この意見を聞かなければ決められないということだ。張りなどを入れている。より経済的なのである。

紀の川大堰は、もう全て設計・積算が終わっているものを、一から設計し直すことは到底できないという返事が返ってきた。鳴鹿大堰の方は、新しい設計理論であり相当に画期的なものであり、新しい設計理論ができていたので全員で頑張ってみる、という返事が返ってきた。

1年間必死に風土工学による設計を詰めて現在の堰案まで詰めた。最後には積算してみる。前の設計で積算も終わっている。対比は明確である。よく鳴鹿の堰は、堰柱が桜御影の石張りなので、せいたくで経費も高くなっている。

は、と言われる人がいるが、中川博次先生は、この意見を聞かなければ決められないということだ。張りなどを入れている。より経済的なのである。

「鳴鹿大堰の堰柱やゲートの設計にも工夫が施される設計に当たっては、随所で中川博次先生や感性工学の長町三生先生の技術的指導を仰いできた。何よりも、角を表し、堰柱間に設置されたゲートは『舟橋』を象徴するなど、この地域の代表的風土が刻み込まれている。正に、次代の要請に

「こつしたゲート設計の基本理念は2003(平成15)年着工、2011(平成23)年竣工のわが国河川ゲートとしては最大級の大河津可動堰(の改築)に受け継がれた」。

参考文獻・『物語日本の治水史』鹿島出版会(富士常葉大学名誉教授、風土工学デザイン研究所会

長とも事務所に持ち帰り、副所長や課長、係長の実質

長に話を持ち掛けた。両所の堰は、堰柱が桜御影の石張りなので、せいたくで経費も高くなっている。

「鳴鹿大堰に続いてこの形式のゲートは信濃川大河

形式のゲートは信濃川大河